ジミーのギター

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ジミーのギター

【Ｎコード】
Ｎ９６５２Ｃ

【作者名】
坂田火魯志

【あらすじ】
その名前からギターをしているジミー。ふらりと流れた北部の街で出会った少女に素晴らしい曲をもらう。ところがその少女は。アメリカンゴーストです。

第一章

ジミーのギター

ジミーがギターをやっている理由は実に簡単であった。
それは名前からであった。彼の名はあのジミ＝ヘンドリックスと同じだ。少し伸ばして発音するがそれでもスペルは同じである。だからはじめたのだ。
「肌の色は違ってもな」
彼は白人であった。母方の祖母は中国系であるがそれでも白い肌であった。けれどそんなことは彼にとってはどうでもいいことであった。５６
「俺はヘンドリックスを越えてやるぜ」
「何でギターなのよ」
そんな彼に母はいつも言っていた。
「サックスにすればいいのに」
母はジャズが好きだった。それでサックスをして欲しかったのだが彼はギターを選んだ。そのことをいつも不満に思っていたのである。
「いいじゃねえかよ、ママ」
彼もまたそれに反論する。
「じゃあ俺にジミーなんて名前にせずにルイにでもすりゃよかったのによ」
「チャーリーにしとけばよかったかしら」
冗談交じりにいつもこう言う母であった。
「どうせなら」
「そうかもな。それだったらサックスだったろうな」
軽く冗談で述べるジミーであった。
「この街だし」
彼はニューオーリンズに住んでいる。言わずと知れたジャズの街

だ。彼の父は今でもバーでマスターをしながらそこでサックスを吹いている。だから母も彼と結婚したのである。
「今からでも遅くないんじゃないの？せめて音楽のジャンルだけでもね」
「そっちも駄目だね」
彼はまた母に言い返す。
「俺はロックしかないんだよ」
「ジミみたいに、ってことね」
「別にヤクとかするわけじゃないしいいだろ？」
彼はそういうものは嫌いであった。酔うのなら音楽だという男なのだ。
「ロックならな」
「まあいいわ。けれどね」
母は全然ジャズに興味を向けようとしない我が子に言う。
「普通にやったんじゃジミにはなれないわよ」
「当たり前でしょ」
はっきりと息子に告げた。
「天才だったのよ。天才になるには」
「もっと努力が必要ってことかい？俺は努力ってやつは」
彼は努力が嫌いであった。自分ではそう思っている。
「違うわ、才能よ」
母も我が子のそうした性格をわかって告げるのだった。
「才能がないとああはなれないわよ」
「そうか、才能か」
彼はそれを聞いて何かを決めた。
「じゃあさ、マミー決めたぜ」
思いついて言ってきた。
「何を？」
「俺ちょっと旅に出て来るぜ」

「何処までよ」
「さてな」
実にいい加減な言葉であった。
「気の赴くままってやつさ」
「そのままメキシコでも行って来たらどう？」
「そりゃ幾ら何でもあれだろ」
母の言葉に思わず苦笑してまた言葉を返す。
「無茶ってやつさ」
「一人旅でアメリカってのも充分無茶でしょ。それでどうやって行くのよ」
「これ一本で行くさ」
手にしたギターを奏でながら答えた。
「後はヒッチハイクでさ」
「まあやってみたらいいわ」
別に止めもしなかった。最初からそんなつもりはなかったが。
「そのかわり生きて帰って来るのよ」
「それは運次第ってことで。明日出るかさ」
「明日！？それはまた急だね」
「思い立ったが吉日さ。じゃあさ」
「ええ、元気でね」
こうして彼はギター一本でヒッチハイクをしながら所謂武者修行に出ることになった。駅前や公園でギターを奏でてお金を貰いながらあてもなく旅をはじめた。
そうしてあちこちを転々としてこの日来たのは。トロントの側にある小さな街だった。
トロントは賑わっているがこの街は静かだった。ヒッチハイクで辿り着いて最初に思ったのはこの街にギターを聴く人間がいるかどうかだった。
「大抵はいるんだけれどな」
そう呟いて街をふらりと歩きだした。歩いていると街角の寂れた

場所に女の子を見た。茶色がかった金髪に黒い目の少女であった。
「可愛いな」
その少女を見た最初の感想であった。可愛いので気になって彼女に声をかけた。見れば何か格好が古臭かった。十九世紀とまではいかないがあまり新しくはない。戦前、しかも禁酒法時代のシカゴを舞台とした映画に出るような格好であった。
その彼女に声をかける。格好にいぶかしみながら。
「あのさ」
「何？」
少女はジミーに声をかけられてふとした感じで彼に顔を向けてきた。
「ちょっと聞きたいことがあるんだけれどさ」
「それってナンパ？」
「そう思ってくれたら幸せだね」
ジョークでこう言葉を返す。
「そのままデートでもってね」
「だったら面白いけれど。一緒にでもどう？」
「おいおい、自分から誘うのかよ」
その言葉に肩をすくめさせて苦笑いを浮かべる。
「じゃあお言葉に甘えてだけれど」
「ええ、いいわよ」
女の子もにこりと笑う。ジミーはこのやり取りに自分はかなり運がいいと思った。

第二章

向こうの言葉に甘えてデートをはじめる。格好がどうにも気になるがいい感じであった。ストリートを二人並んで歩きながら声をかけるのだった。

「それでさ」

「何？」

「この辺りにギターを奏でてもいい店あるかな」

「ああ、成程ね」

女の子はジミーの背中のケースを見て納得したように頷いた。

「そういうことだったの」

「こう見えてもミュージシャンなんだ」

あくまで自称であるが。

「カレッジに通いながらな。決まってるだろ」

「決まってるっていうのは少し古いんじゃないの？」

女の子は彼の言葉にこう返してきた。

「八十年代によく聞いた言葉よ」

「八十年代ねえ」

ジミーはそれを聞いて苦笑いを浮かべた。

「俺が生まれた頃だぜ」

「あら、若いのね」

「若いも何もさ」

その言葉に苦笑いをそのままに言葉を返す。同時に心の中で妙なものも感じていた。

「当たり前だろ」

「当たり前って？」

「俺まだ十代だから」

そう言うのだった。

「八十年代生まれっていうのも」

「それもそうね」
女の子はそれを聞いて納得したような顔になった。
「よく考えたら」
「そうだよ。まああんたの格好からすれば新しいかな」
女の子の服を見ながら言う。
「また随分レトロだね」
「服はこれしかないから」
返事はこうであった。
「だからね。これは別に」
「ふうん。それでさ」
そこまで聞いて話を元に戻すのだった。
「お店あるかな。さっきの話の続きだけれど」
「あるわよ」
あるとのことだった。ジミーはそれを聞いて心の中で喜んだ。
「そうなんだ」
「ほら、そこ」
そうしてすぐ目の前にあるバーを指差すのであった。
「あそこ今探してるのよ、そういう人を」
「これこそ神様の思し召しってやつか。いや」
女の子を笑いながら見る。
「天使のお導きかな」
「天使って？」
「だからさ」
笑って女の子を見るのだった。
「あんたのことだよ」
「天使ね」
女の子はジミーのその言葉を聞いておかしそうな、楽しそうな笑みを浮かべた。アメリカではよく天使を見たという人が多い。ジミーもそれを知っていてあえてこう言ったのである。
「違うかな」

「そうありたいわね、やっぱり」
「じゃあなればいいさ」
ジミーはあっさりとした口調でまた言った。
「これからさ」
「そうね。じゃあこれ」
女の子はそっとジミーに何かを差し出した。
「何だ、これ」
「あげるわ」
見ればそれはメモであった。見てみると何か文章が書かれている。
しかし段々辺りが暗くなってきたのであまりよくは見えなかった。
「ええと？」
「後で読んで」
横から女の子が言ってきた。
「御願いだから」
「ああ、じゃあ」
可愛い女の子に頼まれると弱い。そういうことであった。
「後でな」
「お店の中で見るといいわ」
女の子は今度はこう言ってきた。
「それで御願いね」
「わかったよ。じゃあ今からな」
笑顔で女の子に言葉を返す。そうして一緒に店に入った。
筈だった。だが彼女はもうそこにはいなかった。
「あれっ！？」
「いらっしゃい」
女の子がいなくなって驚く彼に店の親父が声をかけてきた。

第三章

「運がいいな、今ならいい席と酒がたんまりとあるぜ」
「いや、それもいいけれどさ」
彼はその親父に背中のギターケースを見せて言った。
「俺はこっちなんだけれど」
「ああ、そっちも運がいいな」
親父はそちらにも笑って言葉を返してきた。
「今なら一名限定でな」
「じゃあいいかな」
「ああ、頼むぜ」
こうしてとんとん拍子で店でギターを奏でさせてもらうことになった。ジミーは一旦店の控え室に案内してもらってそこを休憩所とした。そうしてここでさっきあの女の子から貰ったメモを取り出した。見ればそれは歌詞であった。
「ふうん。ラブソングか」
見れば完全にそうであった。しかもかなり甘い歌詞である。ジミーは最初それを見てマユを少し顰めさせたのであった。
「ちょっと甘過ぎるか？」
そう思ったのだ。彼はどちらかというと失恋の歌をよく作るので甘い歌は苦手なのだ。だがこの歌はそれでもいい感じであった。
「けれどこれは」
試しにギターを持ってまだ歌詞の決まっていない曲に合わせて歌ってみた。すると。
「あれっ」
歌っている自分が驚く程いい感じであった。歌っていてこれはいけると思った。
「これはいいや」
早速店でも歌ってみることにした。店の中に入るともう客達が待

っていた。
「早速頼むな」
「はい」
親父に応える。すぐに席に座ってギターを構えた。
「それで兄ちゃん」
「何を歌うんだい？」
「本当はロックなんだけれどさ」
ジミーは笑って客達に答える。
「ちょっと今回は特別にしっとりとした曲をやらせてもらうよ」
「しっとりか」
「ああ、駄目かい？」
客達に尋ねる。
「かなり良さげな曲なんだけれどな」
「いや、それでいいさ」
「それで頼むよ」
だが客達は寛容であった。彼がその曲を歌うことを朗らかな顔で許したのであった。彼はそれを見て心の中で笑うのであった。
「それじゃあ」
あの少女のくれた歌詞をそのまま自分の曲に合わせて歌う。すると客達はすぐに黙りこくってしまった。あれ程騒がしかったというのに。
曲が奏でられる間ずっと沈黙が続いた。それが終わると客達は拍手で彼を迎えたのだった。
「凄いじゃねえか」
「ああ、あんたプロなんじゃないのかい？」
「残念だけれどまだそこまではな」
残念な苦笑いを浮かべて彼等に応えた。
「まだ先なんだよ」
「おや、そうかい」
「けれどこれならいけるよな」

皆で彼にそう言う。
「なあ」
「そうだよな」
「へへっ、そう思ってくれるならさ」
ここで彼は調子に乗った。
「奮発してくれよ、チップの方は」
「そっちはもうプロかよ」
「こりゃどうしたもんだよ」
「おっと、自伝にはこう書いておくからさ」
調子に乗ってまた言う。
「お客さん達は俺の歌に感動していつもの倍のチップを渡してくれたってさ」
「じゃあ書けよ」
「俺達のことをな」
「ああ、勿論さ」
そんな話をしながら店の演奏を成功に終わらせた。そのおかげでこの日は美味い飯と酒、雨露を凌げる場所を手に入れることができた。彼にとっては最高の一日となった。
彼は朝になると安いホテルを出た。そして店でパンと牛乳を買った。それを食べた後で街の公園に出た。そこでまたギターを奏でだしたのである。公園は静かでまだ人も少ない朝の露と木々の緑が心地よかった。ジミーはその中でギターの練習をはじめたのだ。
ベンチに座ってギターを奏でているとそこに誰かが来た。気配に気付いてそちらに顔を向けるとあの女の子がいた。
「昨日凄かったらしいわね」
「まあな」
女の子に顔を向けて答えた。
「大成功だったぜ。これでスターに一歩近付いたってわけだ」
「おめでとう」
「ああ。ところでさ」

ここで彼女に問わずにはいられなかった。
「昨日急に消えたよな」
そのことについて問う。
「どうしてなんだ、あれは」
「気にしないで」
それに対する返答はあまりにも変わったものであった。
「それは」
「おいおい、気にするなってか」
あまりにもぶしつけな言葉に思わず笑ってしまった。
「何だよ、それって」
「よくあることじゃない、女の子が急にいなくなるって」
「そうか？」
そんなことは初耳だった。ジミーは顔を顰めさせた。
「そんなのは聞いたこともないがね」
「けれど今はこうしているわよ」
何か反論を煙にまくような言葉がまた出た。
「それでいいじゃない」
「まあどっちにしろあんたとはまだそんなに話したわけじゃないしな」
よく考えればそうだった。深い関係ではとてもないしどうでもいいと言えばそうなるものだった。ジミーにしてもこの街もすぐに立ち去るものなのでまあいいかと思った。
「じゃあ気にしないでおくさ」
「そういうこと。それでね」
女の子はまたジミーに言ってきた。
「昨日の歌詞よかったでしょ」
「それはな」
彼も認めることだった。
「成功はあんたのおかげだな」
「感謝しなさいよ」

「有り難う」
素直に礼を述べた。
「御礼に朝飯でもおごろうか？」
「それはいいわ」
ジミーの申し出はあっさりと断るのだった。
「別にね」
「いいのかよ」
「別の御礼が欲しいの」
そのうえでこう言ってきた。
「いいかしら」
「いいかしらって言われてもよ」
ジミーは微妙な顔を女の子に向けて言う。
「俺あんまり金ないぜ。見ればわかると思うけれどさ」
「お金じゃないわよ」
「じゃあ何なんだ？」
お金じゃないと言われたら。何のことかと思った。

第四章

「貰って欲しいものがあるの」
女の子はこう言うのだった。
「それで御願い」
「俺が貰うのか」
「ええ、駄目かしら」
「そうだな。まあいいか」
ほんの少し考えてから答えた。
「それで。何なんだ？」
「これ」
差し出してきたのは。またメモであった。
「これ貰って欲しいのだけれど」
「！？これってよ」
そのメモを見て女の子を見上げて言う。
「歌詞じゃないのかい？」
「その歌詞よ。駄目かしら」
「いや、いいぜ」
ジミーとしてもこれを拒む理由はなかった。歌詞はあればある程いい。実は彼は作曲は得意なのだが作詞は今一つ苦手なのだ。それで昨日も女の子の歌詞を使ったのである。
「有り難く貰っておくさ」
「きっとこれもいい歌になると思うから」
にこりと笑ってジミーに告げる。
「可愛がってね」
「わかったさ。じゃあ有り難くな」
「ええ」
こうして彼はその歌詞も受け取った。自分の曲と合わせてみたそれはやはり美しくしっとりとしたいい曲であった。所謂バラードで

あるがそれでも彼の気に入ったのである。
公園で演奏してみると道行く人々に好評であった。ストリートミュージシャンとして演奏する時はギターケースをお金の受け皿にするのだがそれが一杯になる程であった。
演奏が終わった夕方。彼は公園の花壇の前のベンチに座っていた。そこで色とりどりの花達を見ていたのである。赤に黄色、白とみらびやかなものであった。
花はチューリップが多い。彼は満足した顔でそのチューリップ達を見ていたのである。
そこに。また彼女が来た。
「今回も上手くいったみたいね」
「ああ」
もうそれが誰なのかはわかっていた。彼女である。
「おかげさまでね。繁盛したよ」
「感謝しなさい」
女の子は笑って彼に言ってきた。
「私のおかげよ」
「ああ、全くだ」
彼もそれを認める。笑って。
「こんなにいい気持ちになれたのはさ、正直はじめてだよ」
「そうだったの」
「だってよ、流れだぜ」
笑みを浮かべるがそれは苦笑いであった。
「どうしても集まったり集まらなかったりで。しんどいものさ」
「ふうん」
「まああんたに言っても仕方ないけれどな」
ここまで言って一旦苦笑いを消した。
「それはな」
「まあそうね。そうだけれど」
「何だよ」

「それでも今日は成功したじゃない」
それは事実だった。それだけは笑顔で認められるものであった。
「でしょ？」
「ああ。こんないい歌詞ははじめてだよ。あんたの曲かな」
「そうよ」
答えは予想されたものであった。だから聞いても別に何も思わなかった。
「誰も歌うことはないから。それで」
「誰もって」
ジミーは女の子のその言葉に眉を顰めさせた。
「あんたはどうなんだよ」
「私は歌えないの」
少女は寂しげな笑みを浮かべてジミーに答えた。
「残念だけれど」
「残念ってまた変なこと言うな」
ジミーはこの言葉の意味がどうしてもわからなかった。
「どういうことなんだよ、それって」
「私は本当はここにはいないから」
「ここにって！？」
さらにわからない言葉であった。ジミーは眉を顰めさせるだけでなくその首も傾げさせて考えた。女の子の言葉の意味が全くわからなかったのだ。
「どういうことなんだ、それって」
「私。本当は七十年以上も前にここからいなくなったの」
女の子はまた言った。
「もうね。結構経つわね」
「それってまさか」
「そう、そのまさか」
女の子は答えた。ジミーも言葉の意味がわかった。
「わかたわね」

「ああ、そういうことか」
納得して頷いた。それならば話がわかった。
「あんた、だからなのか」
「歌えない理由は。それなのよ」
「道理で服が古いわけだ」
それもようやく納得がいった。それならば話がわかる。
「あんた、それでもずっとここにいたんだな」
「探してたのよ」
女の子は答えた。
「私の曲を歌ってくれる人。やっと見つけたわ」
「俺でいいの？」
いつもは明るい自信家のジミーも今日ばかりは違っていた。今日は女の子の前で真剣な顔で静かに謙虚になっていたのであった。
「俺なんかでさ」
「貴方だからよ」
女の子は優しい笑顔で彼に答えた。
「貴方のギターで歌って欲しいの。いいかしら」
「俺でよかったら」
彼も謙虚な声で答えた。
「歌わせてもらうよ」
「有り難う。じゃあ頼むわね」
女の子は優しい笑顔のまま彼に言う。彼もその言葉を受けていた。
「ずっとね。歌っていて」
「ああ、これからどうなるかわからないけれどな」
ジミーも答えて言う。
「歌うさ、ずっと」
「御願い。それじゃあね」
「これからどうするんだ？」
「もう伝えたいことは伝えたから」
そうジミーに答える。

「これでね」
「行くんだな」
「ええ、上に」
空を指差して言う、
「行くわ。やっと行けるわ」
「伝えたくて。ずっと残っていたしな」
「それももう終わり」
その姿が消えかけていた。本当に上に行こうとしているのがわかる。
「後は。御願いね」
「ああ。それじゃあさ」
ジミーはギターケースを開けた。そうしてギターを手に取って彼女に言う。
「最後に一曲どうだい？」
「いいの？」
「だから俺はミュージシャンだぜ」
笑って言うその言葉は笑顔だった。多分に自称であるが。
「だからさ。気にするなよ」
「そう。有り難う」
「礼を言うのも俺さ」
また言った。
「そこんところも宜しくな」
「じゃあ」
「ああ、聴いてくれよ」
ギターの演奏をはじめて女の子に言った。
「俺の新曲さ。歌詞は即興だけれどな、それでもいいかい？」
「悪いわけないじゃない」
姿をゆっくりと薄くさせながら。答える。
「だから」
「じゃあ。聴いてくれよ」

演奏を本格的にはじめて。また声をかける。
「俺の祝福の歌」
ジミーは歌いはじめた。女の子は清らかな笑みでその曲を聴いていた。
曲が進むにつれてその姿が薄くなり。終わる頃には完全に天に昇っていた。歌い終えたジミーは彼女がいなくなったのを確かめて静かに笑ってこう言った。
「天国でもさ」
空を見上げる。彼女のいる空を。
「いい歌詞を作ればいいさ」
伝説のギタリストジミー＝オズバーンの学生の時の話だ。これが本当なのか作り話なのかはわからない。だが彼がこの話をずっとその心に留めてギターを奏でていたのは事実である。その心は確かにあったのだ。

ジミーのギター　　完

２００７・１０・１０

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9652c/

ジミーのギター

2010年10月8日15時44分発行